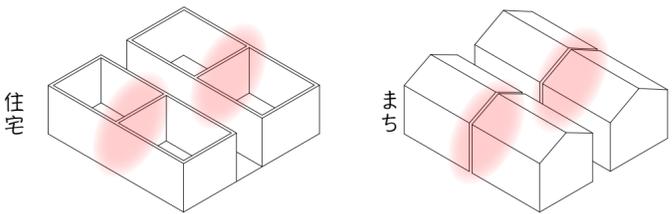




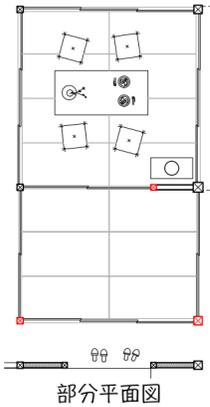
1. 忘れられた“間”



無駄を限りなく排除した住宅、コンパクトシティ、現代の日本では建築から街単位まで縮小、高密度化がなされてきた。そんな中、コロナウイルスの影響で制限された暮らしを強いられ、私たちは住環境やまちに本来あるべき“間”の必要性に気づかされた。

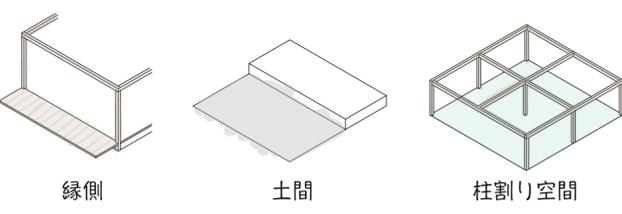
3. 建築の衣替え

私たちには、季節の推移によって衣服を変える衣替えという風習がある。季節や気候風土が豊かな日本において、衣服だけではなく常に私たちの暮らしを守ってくれる家も衣替えする必要があると考える。



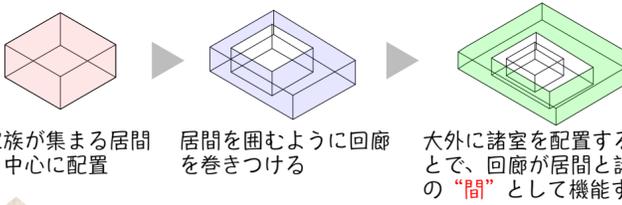
真壁とすることで建具の入る“間”を与るとともに内部空間に露出する柱が、空間にアクセントを与える。取替可能な建具を間仕切りとして採用することで、外部環境に合わせた自然な住環境を整えることができる。建具の仕切り方で個室として、大人数が集まる場としてなど、その場に応じた空間を創出することができる。また季節や気候によって変わる間仕切りは、空間を彩るだけでなく入れ替える手間が、家族のコミュニティを促してくれる。

2. 古民家が持つ“間”



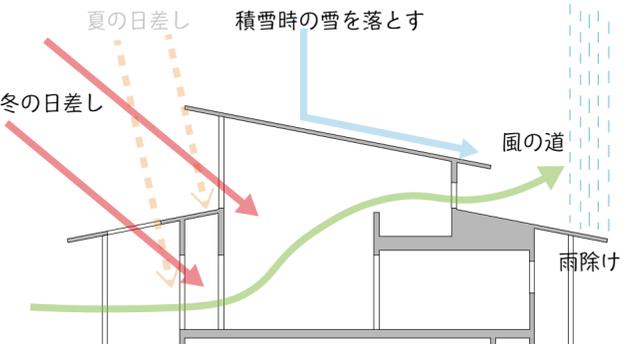
古民家によくみられる縁側と土間はそれぞれ内と外、パブリックとプライベートの“間”となっていた。また、内部空間は柱間を壁ではなく、ふすまや、障子、ガラスなど可変性のある建具を間仕切りとすることで連続する空間に“間”を作り出す役割を担っていた。

4. 空間構成



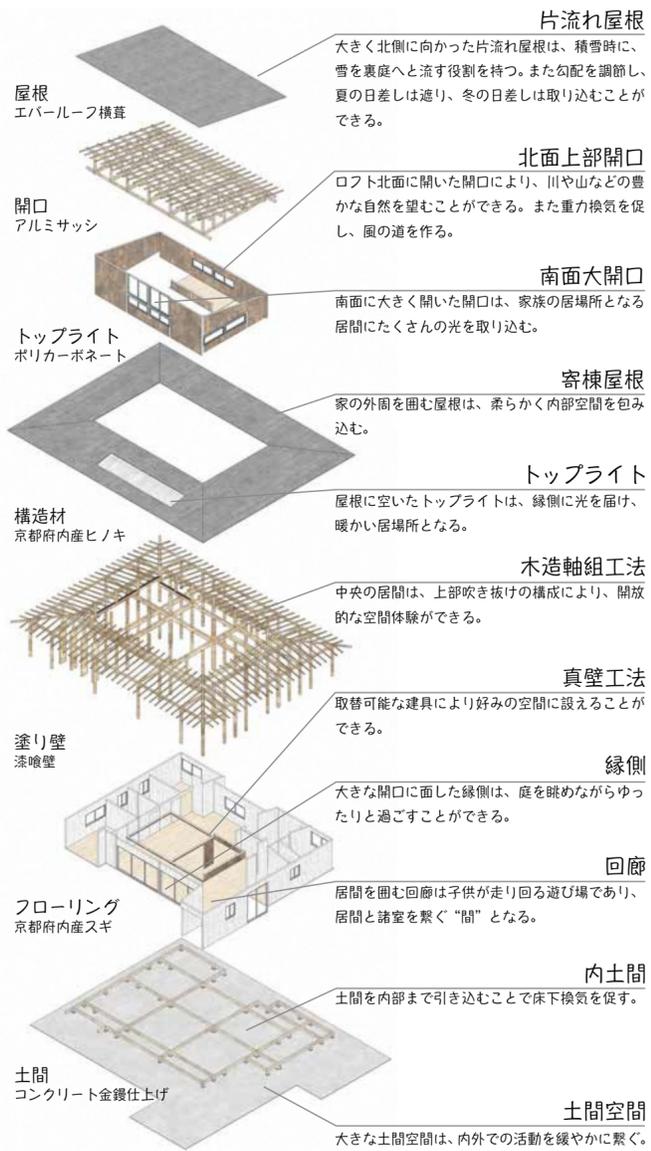
家族が集まる居間を中心に配置
居間を囲むように回廊を巻きつける
大外に諸室を配置することで、回廊が居間と諸室の“間”として機能する

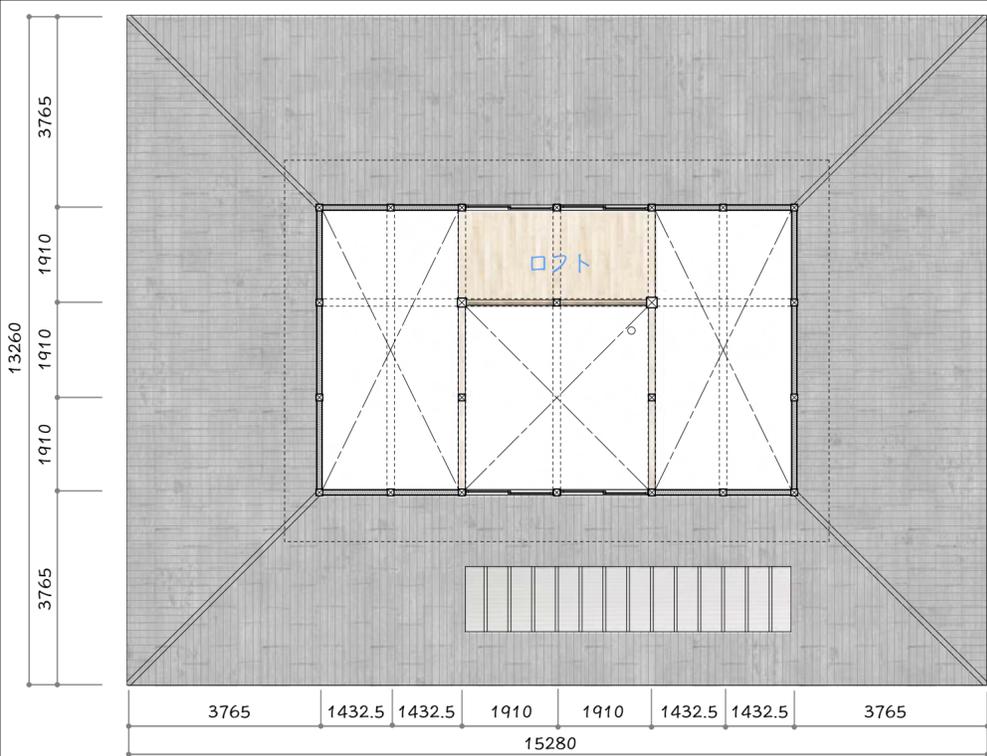
5. 環境に合わせた断面計画



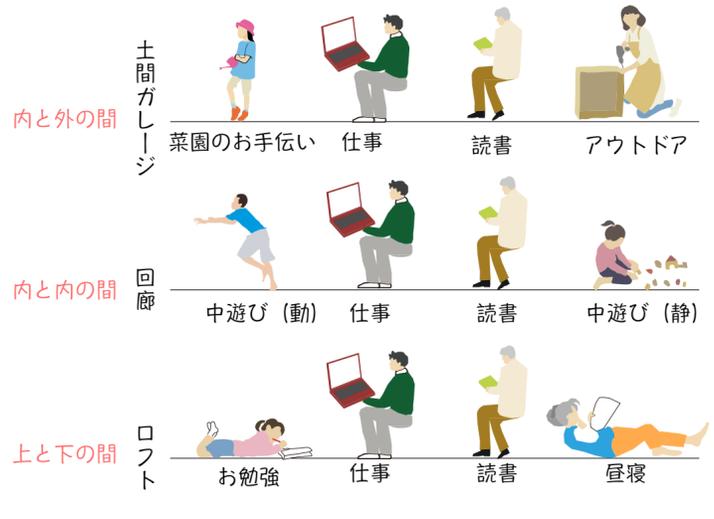
屋根勾配を操作することで日差しや、風、雨、雪などの外的環境に配慮した断面計画

6. 構成ダイアグラム





7. 多様性を許容する“間”

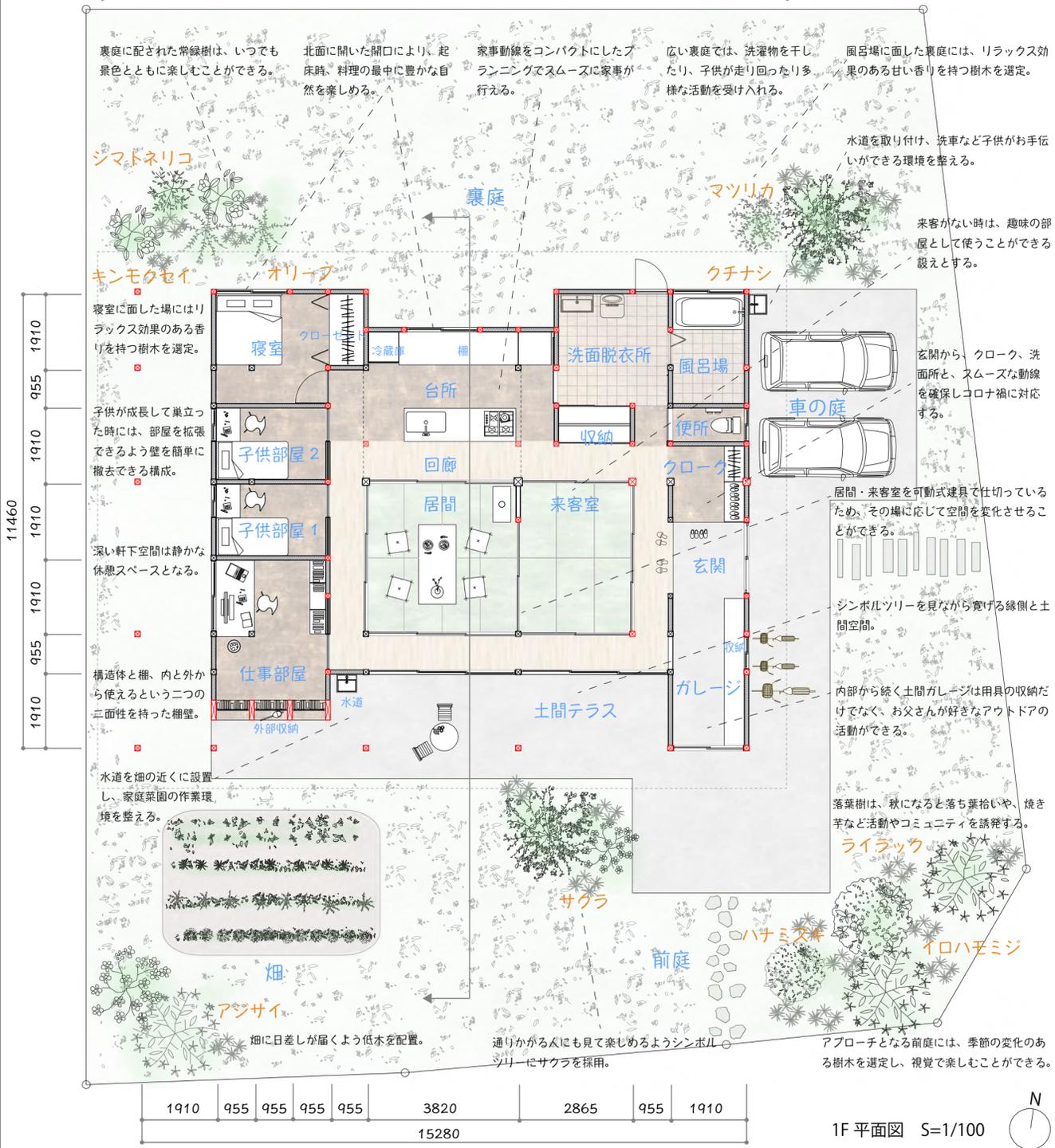
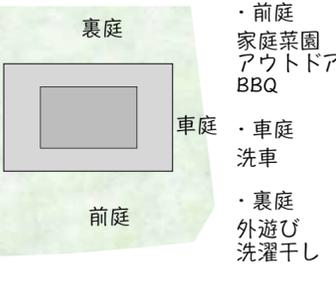


内部空間にできた様々な“間”は、一定の活動に囚われない自由度を持っている。気分やその日の気候によって仕事場を変えたり、日々の暮らしの中に新たな選択肢を与えてくれるだろう。

8. 面積表

1F 床面積	126.3 m ²
2F 床面積	7.5 m ²
建築面積	126.3 m ²
建蔽率	21.5%
容積率	22.7%

9. 3つの庭



大きなトップライトから光を取り込むため、家族が集まる居間は明るく暖かい空間。取替可能建具が内部空間を柔らかく仕切り、レイヤー状に空間が連続する。



エントランス兼ガレージの土間空間は、外部まで続いているため内外を連続して使うことができる。露出している木が落ち着きのある空間を演出する。

